

〈中学校 国語科〉

語彙を豊かにし、表現力・理解力を高める授業の工夫

——ことば遊びの指導を通して——

知念村立知念中学校教諭 知 花 綾 子

目 次

I 研究テーマ設定の理由	81
II 研究仮説	81
III 研究の全体構想図	82
IV 研究内容	
1 語彙指導の内容	83
(1) 言語事項の指導の内容	
(2) 語彙指導の内容	
2 語彙指導の方法	83
(1) 学習指導要領での位置付け	
(2) ことばを豊かにする語彙指導	
(3) 国語科におけることば遊びを通じた指導	
V 授業実践	
1 単元について	85
2 単元設定理由	85
3 単元指導目標	86
4 単元指導計画	86
5 学習意欲を高めるために工夫したこと	87
6 本時の指導計画	88
7 評価	88
8 結果の考察	89
VI 研究の成果と今後の課題	
1 研究の成果	90
2 今後の課題	90

語彙を豊かにし、表現力・理解力を高める授業の工夫

—— ことば遊びの指導を通して ——

知念村立知念中学校教諭 知 花 綾 子

I テーマ設定の理由

本来国語の学習は、言葉や文字を学び、語彙を増やし、より豊かな表現、理解に結びつけ、他教科の学習に役立つものでなくてはならない。また、国語の学習で身につけた力が、学校生活はもちろん社会生活においても生きて働くものでなければならない。何かに感動したとき、何事かを考えているとき、そして、そのことを表現する、伝えるとき、常にことばを使っている。ことばを使わなければ、伝え合うことさえ難しい。したがって、ことばの感覚を磨き、豊かな表現力を身につける必要がある。

人はことばで思考する。自己を振り返り考える能力もことばの力によるものが大きい。最近よく聞かれる「キレる子ども達」のほとんどが、考える前に「キレ」てしまっているように思う。不快の状況を「なぜか？」と自己分析する事が出来ずにいる。ことば（語彙）に乏しく考える力が弱ければ、思考という行為を飛び越して「キレる」状態になりやすくなる。最近の子ども達のことばを聞いていても、単語のみの会話であったり、話題や笑いの中のことばに関しても、テレビやマンガなどのマス・メディアからの影響を多く受けていると考えられる。一方的に押しつけられていく情報過多の社会で、子ども達がことばを咀嚼し、じっくりと自分のことばでものを考え表現する姿勢をつくるのは難しいと思われる。

言語指導、特にことばの指導は国語教育の基礎となる重要な部分であるにもかかわらず、取り立てて指導するのが難しい分野である。授業においても、言語操作中心に偏りがちで、ことばが伝え合うものだというを中心にした指導はなされてこなかった。知識としてのことばは知っているが、実際の生活の場では理解できない、あるいは表現できない生徒が多いように思われる。わが校に於いても、ある先生が道徳の授業について「出てくる単語の意味から説明しないとイケない。内容理解だけで道徳の時間の半分は使う。まるで国語の授業をしているようだ。」と話していた。また、ある顧問の先生からも「部活動で指導していても基礎的なことばを知らないから時間がかかる。」と言われ、国語科教師として耳が痛い経験をした。学習活動の場面で、お互いに理解交流するためには、より豊かな理解力・表現力が重要になる。その理解力・表現力の根底を支えるのが語彙力であると考えている。

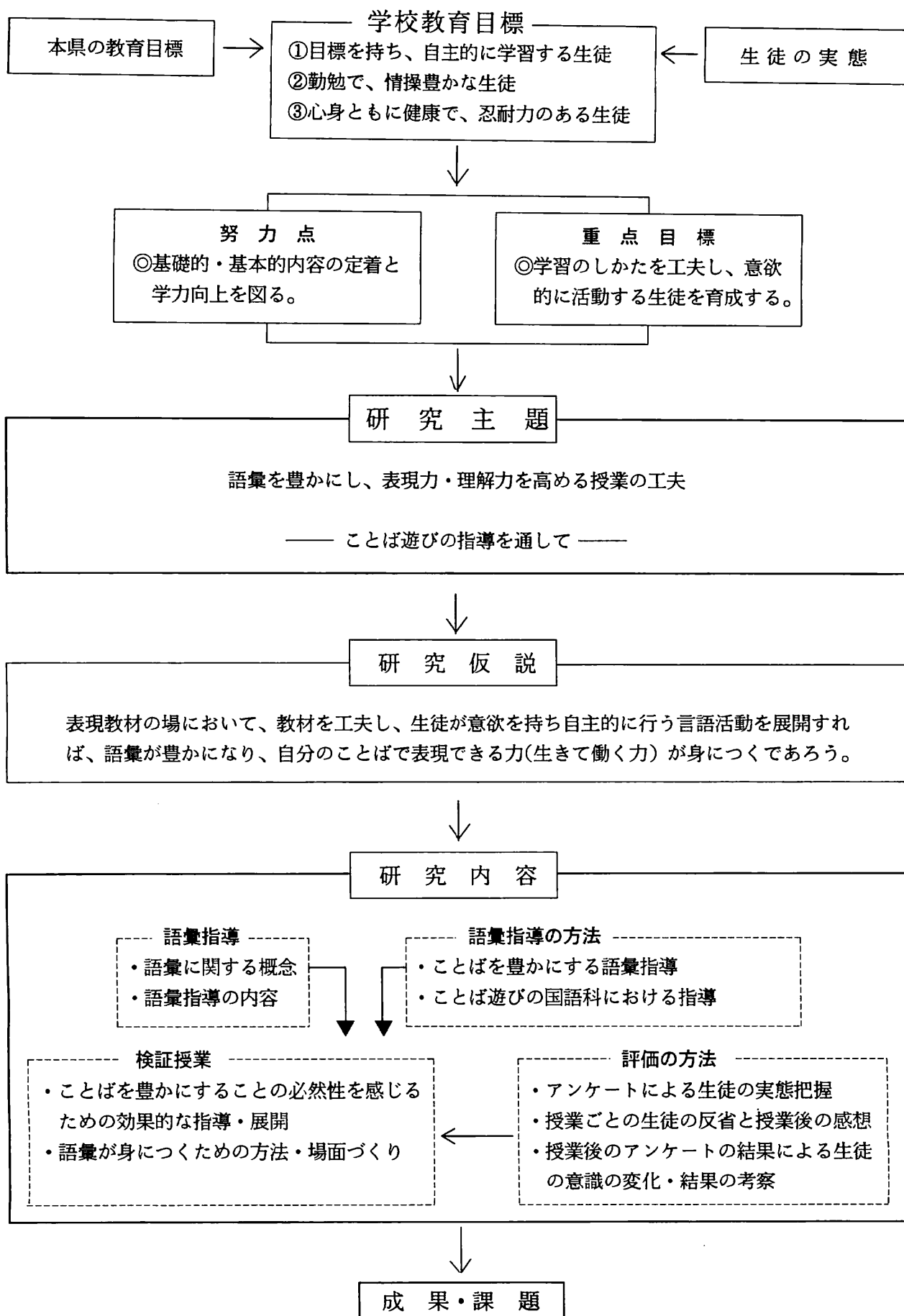
しかし、表現力・理解力、語彙力を身につけることの必要性を感じ、ことばを習得するために、自らがことばへの興味関心を深めて、適切な表現を求めていく姿勢を生徒に期待するのは厳しい状況にある。生徒が、ことばを豊かにすることが必然的であると認め、自ら考え自分のことばで表現ができるような方向づけをしていかなければならない。その手だての一つとして「ことば遊び」がある。遊びは誰のものでもない。個々が自分の能力を精一杯発揮して真剣に参加するのである。子どもの伸びやかな感性、無限に広がる発想の豊かさ、それらをことばで遊ぶ授業を通して表現させることが出来る。ことばで遊ぶことで自然にことばに興味を持つことになる。楽しい雰囲気、愉快的気持ちでいながら、真剣にことばに向き合う活動を通して、互いにことばの力を育てあうことができる。

以上のことから知識としてだけのことばではなく、ことばについて、生徒が真剣に考える場を作りたい。そして、ことば遊びを国語科として教材に取り入れ、ことばの力を育て、ことばの生活をより豊かにするために、教材の工夫をする必要がある。語彙を豊かにし理解を深め、自分の考えを自分のことばで表現できる力（生きて働くことばの力）を身につけさせるために本テーマを設定した。

II 研究仮説

表現教材の場において、教材を工夫し、生徒が意欲を持ち自主的に行う言語活動を展開すれば、語彙が豊かになり、自分のことばで表現できる力（生きて働く力）が身につくであろう。

Ⅲ 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 語彙指導の内容

(1) 言語事項の指導の内容

言語指導、特に語句・語彙指導は国語科教育の基礎となる重要な部分であると言われながらも、取り立てて指導するのが難しい分野である。普段の生活の中で、当たり前のように言語を使っている私達は、日常生活のいろんな場面で、聞く・話す・読む・書くの言語活動を行いながら、知らず知らずのうちに、語句・語彙の量を増やし、身につけている。国語科における言語指導は、そのような言語を改めて取り上げ、意識させ、さらに多くの知識を習得させ、その使い方に関心を持たせたりするものである。しかし、その範囲や広がり、習得量は目に見えないものであり判断が難しいところである。

文学的作品を教材とした授業や、言語指導の中の分野でも、文法や漢字は、教える内容がある程度ははっきりしているし、習得した効果もわかりやすい。しかし、語句・語彙指導は、その指導方法についても、これが正しいと言いきれず、教えた手応えも弱く、その効果も計りにくい。「日常の言語生活をふりかえりことばのきまりについて気づかせ、言語生活の向上に役立てることを重視する」と新指導要領で、言語教育の立場が重視されているように、言語指導、特に語句・語彙指導について、そのあり方を問いなおす必要がある。その際、指導が形式的になったり細かくなりすぎないように注意する必要がある。言葉の役割について理解するだけでなく、実際の表現力や理解力を身につけるために役立てるようにしなければならないであろう。

(1) 語彙指導の内容

① 語彙の概念

辞典には二十二万余語が編集されている。日本語はいろんな様相を持っており、備えている語句は、おびただしい量におよぶ。それらの語句を、何らかの観点に基づいて、ひとまとめにした集合を語彙という。語句が一つひとつの単語を指すのに対し、語彙はあるまとまりを持った語の集まりを指す。例えば、「海」という言葉を聞いたとき、連想されることばは人によって様々であろう。その量やことばは個々によって違う。これが「個人の語彙」(図①)と言われるものである。その数が多く、なおかつ使いこなすことが出来れば、豊かな表現が出来るのである。ある一つの事象を表現しようという欲求が生まれ、表現しようとするとき、いくつかの語句が頭に浮かび、その中で最も適切な語句が選出される。例えば「怒り」の感情を記したいとき「激怒」「立腹」「憤慨」等、多くの語句の中から一番妥当な語句が選出されるのである。

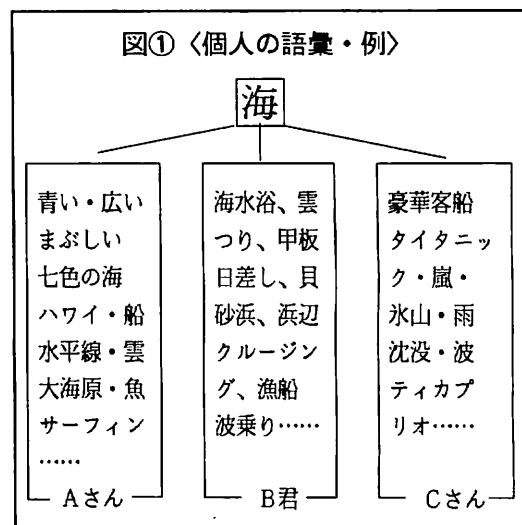
② 語彙を豊かにすること

表現力・理解力を高めるために語彙を豊かにする必要があるが、それは単に「語彙を増やす」ということだけではない。一つのことばが身につくということは、認識の深化拡充につながる。「献身」ということばを、辞書で意味を調べて身につける人もいる。または、森鷗外の『最後の一句』を読み、主人公の生き方に基づいた意味で身につけた人もいる。後者の人物が「献身」ということばに出会うとき、いつでも森鷗外の考え方や結びついて、理解表現するであろう。語彙を豊かにするということは、一人の人間の生き方・あり方にもつながる大切なことである。

2 語彙指導の方法

(2) 学習指導要領での位置付け

現行指導要領においても、新指導要領においても言語の教育としての[言語事項]が、「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の指導を通して、表現・理解に役立てるための基礎的な事項として指導することとなっている。



(2) ことばを豊かにする語彙指導

これまでの語彙指導は、辞書を活用して、対義語・類義語と関連させた意味調べ中心に偏りがちであった。より多くの語句を習得させようと、生徒は辞書を調べ、似たことば、言い換えることが出来ることばなどを採りだし、知識として積み込んでいった。例えば「あの人のしゃれはおもしろい。」という表現があるとする。「おもしろい」を「おかしい」に言い換えても、文章の意味はほとんど変わらない。「おもしろい」と「おかしい」の意味は似ている、言い換えられると理解する。これが類義語についての指導である。しかし「あの人はおもしろい。」という表現で、「おもしろい」と「おかしい」は言い換えられない。習得した語句の数を競うのではなく、類義語に見られる微妙なニュアンスの違いを意識して、場面や状況に応じた言葉を使い、表現することが語彙指導における留意点である。

(3) 国語科におけることばあそびを通した指導

① ことば遊びを取り入れる意義

子どもの心は本来、伸びやかなものであるし、発想の豊かさは大人が舌を巻くものである。その豊かさを、授業に出せないのは、教師中心の授業を進めていくうちにどこかで制限してしまっているからではないだろうか。授業をしていても、教師の一方的押し付け型になりがちで、生徒が自由に教室で表現できてないと感じることもあった。教師の発問にも、ある程度予想された答しか返ってこない。子どもの無限に広がる発想を強制することなく、授業で表現させたい。その方法の一つとして、ことば遊びの授業がある。

遊びはみんなのものである。遊びというものは、誰から言い出そうが、成立してしまえば、誰のものでもなくなる。「しりとり」や「なぞなぞ遊び」に熱中する子ども達の集団の中で、この遊びは誰かのものであると考える子はいないだろう。子ども一人一人が主人公になり、個々が自分の能力を精一杯発揮して遊びに参加するのである。学級でみんなと楽しみながらことばが増えていく。これが、教室にことば遊びを持ち込む大きな理由である。

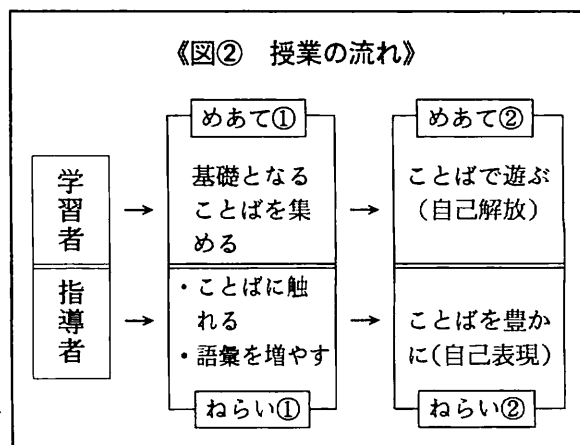
ことば遊びはアイデア勝負である。授業の中の「ことば遊び」を、ただの「遊び」にしてしまわないように留意する必要がある。教師のねらいとすることと、生徒のめあてに、共通する部分も必要であるし、生徒の活動の中に教師のねらいをいかに反映させるかを常に念頭に置き、授業展開を考える必要がある。(図②)

ことば遊びは自己表現の一つの形態であり、その中で子どもは自己を開放する。ことば遊びは生徒に主体的な言語活動の場を提供してくれる。そしてそれぞれの持っていることばの量を気にすることなく自分のことばの力を精一杯働かせて思考し、表現しようとする。生き生きとした表情で遊びに参加し、なおかつ、本気になってことばに対応する。このように、生徒が主体的に言語活動をする中で言語能力は育成されるのである。

② 国語科の授業におけることば遊びの例

授業開きに自分の名をおり込んだ紹介文を書かせる。ただの自己紹介文ではマンネリであるし、飽きてしまっているだろう。まず、教師が自己紹介文を作って見せると、生徒は興味を覚え自分でも作ろうとする。これが案外難しく、文に必ず名前の一文字を入れるという制約がある。しかし、難しいながらも自分の語彙を駆使し、精一杯作ろうとする。友達に協力を求めることで、新たなことばを獲得したり、頭をフル回転させて、自分を表現することばを探し、多様な語句の中から選択する。自分の名前を織り込むという制約のある作業を通して、いかに自分を豊かに表現するか。ことばと楽しく、そして真剣に向き合う時間である。このような表現は古典の中にも存在している。

「からころも きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる たびをしぞおもふ」古典の歌物語



『東下り』の中で詠まれた短歌であり、各句の頭のことばを繋げると「かきつばた」となる。これは古典の中の「ことば遊び」の例である。

光村図書中学2年「漢字の学習」にも「ことば遊び」がある《図③》。始めは難しく感じる生徒もいるが、クイズ形式なので、全員が問題を解こうとする。友人に聞いたり、漢和辞典や国語辞典を調べたり、いろいろ当てはめたりしながら一時間の授業に取り組むのである。

③ その他のことば遊び

子ども達は「なぞ」が好きである。すぐに題材に飛びつき解こうとする。その

とき頭の中は常に活発に動いている。『ふたつ文字 牛の角文字 直ぐな文字 ゆがみ文字とぞ 君は覚ゆる』後嵯峨上皇へ幼い娘があてたもので吉田兼好が徒然草第六十二段に記録している。これもなぞなぞで「こ・ひ・し・く思っています」という意味の歌で、ことばで遊んでいるのである。

「数え歌」や「語呂合せ」「早口ことば」も昔からある『ことば遊び』の一つである。これらの遊びも、子供の発想を膨らませ、個性が表れて教室が多様に変化していく「ことば遊び」である。

ドリル的な発想の「ことば遊び」の方法もある。教師が自作問題をプリントにして生徒に出題し、それを解いていったり、辞典を使ったり、調べたりしながらしながら、語彙を増やしていくことば遊びである。

V 授業実践

1 単元について

(1) 単元名 日本語の諸相

—慣用句を学び、使ってみよう—

2 単元設定理由

(2) 教材観

私達は普段何気なくことばを使っている。人と話すとき、ものを考えているとき書きものをするときも、常にアタマの中でことばを使っている。だが、そのことをあえて意識していない。日ごろの言語活動を振り返り、さまざまな角度からことばを見つめなおすと、いろいろな面が見えてくる。ことわざ、慣用句、敬語、方言、様々である。人々は日常会話の中で、これらを、相手や場面によって使い分け、また自己表現の手段として使いこなすことができた。しかし、最近は、知らない、使えない、使わない若者、特に中学生が増えているという。我が校に於いても、ことわざや慣用句に関しては、授業の表現活動、あるいは学校生活の中においても耳にすることがほとんどない。

ことわざや慣用句は、家庭の躰の中や、友人との会話等の中などで、それが持ち出される具体的な状況をふまえて身につくものである。しかし、現在、核家族、共働きの家庭が増え、親子の対話も希薄になりつつある。また、近所づきあいの疎遠により、地域の老人との会話、先輩との対話が乏しくなっている。したがって、ことわざや慣用句との出会いは、学校生活、特に国語科という狭い範囲に限られている。知識としてのことわざを知っていても、実際には使えないというのが子供達の現状である。まさしく「論語読み論語知らず」ということわざのとおりであり、それは慣用句についても同様である。

「慣用句は、いくつかの語が固定的に結びついて、全体として特定の意味を表す語をいう。慣用句は、伝統的な言い表し方の一つであり、国語の表現において果たしている役割は決して小さくはない。文章を的確に読むためには、慣用句の理解が必要であること、伝統的な言い表し方を理解して創造的

《図③ 光村図書「漢字の学習」より》

次の(1)~(5)は、それぞれ二つの漢字を幾つかの部分に分け、同じ大きさにして並べ換えてある。それらを下の点線のわくの中に書き入れて、一つの言葉になるようにしよう。

〔例〕 日 言 正 月 ↓

(1) 反 木 失 金 ↓

(2) 土 口 寸 十 ↓

(3) 言 立 里 舌 ↓

(4) 口 方 言 門 ↓

下に示した文字群の中から、漢字を選んで○の中に当てはめ、二字の熟語ができるようにしよう。

調 文 国
量 学 法

〔文字群〕

な表現を工夫すること、などについて理解させることが大切である。」と中学校指導書国語編に記されている。確かに中学生の生活のなかではあまり使わないが、社会に出たらいくらでも使われるのが慣用句である。慣用句を、意味がわかるだけ（理解語彙）にとどめておくのではなく、日常生活のなかで適切に使えるよう（表現語彙）になることを期待したい。さらには自らの言語生活を振り返り、見つめ直すことで、今後の生活において、言語感覚を磨き、より豊かな言語生活者であろうという姿勢を育てるべく本単元を設定した。

(2) 生徒観

全体的におとなしい学級である。落ち着いて静かに学習するが、集中に欠ける面も見られる。学力の面から見ると上位者と下位者の差が大きい。特に基礎学力の低い子の理解力・応用力不足が目立ち、授業の展開に遅れがちである。（中略）

慣用句についてのアンケート結果を見ると、いくつかの慣用句について「聞いたことはあるが、意味がわからない」生徒が多い。そして、知っていても、日常の会話の中で使わない子もいる。その理由はほぼ似通っていて「誰も使わないから」「使う必要がないから」を理由に挙げる子が多かった。また中には、意味を理解しているが「使い方が分からないから」という生徒も少なくなかった。つまり、日常生活の具体的な状況や場面において使えないということである。

さらに問題点は、「慣用句」と「ことわざ」、「語呂合わせ」「四字熟語」「故事成語」が混同している生徒もアンケート上に見られたということだ。これらのことばを整理したうえで慣用句を位置付けて、日常生活のなかでの適切な使い方を学ばせる必要があることを感じた。

(3) 指導観（省略）

3 単元指導目標

(1) 価値目標

身の回りにある言語生活を見直し、慣用句を数多く学び、それを日常生活において、具体的な場面、状況に応じて使える力を養う。

(2) 観点別指導目標

- ① ことばへの関心や認識を深め、感覚を磨き、ことばを豊かにしていこうとする態度を身につけさせる。（意欲・関心・態度）
- ② 具体的な状況や場に応じて慣用句を使える力を身につけさせる。（表現）
- ③ 会話文（文脈）の読解を通して内容の理解や自分の表現に役立てさせる。（理解）
- ④ 伝統的な表現の一つである慣用句を数多く学ばせる。（言語事項）

4 単元指導計画

時間	指導内容	学習活動	備考
第一時	(1) 日常の言語生活を見つめさせる。 (2) 日本語のなかで慣用句を位置付けさせ慣用句の特徴について学ばせる。 (3) 班ごとに調べさせる。	(1) 「ムカつく」ということばについて考える。 (2) ことわざ・慣用句・四字熟語・故事成語の例を出し、これまでの学習も想起しながら区別する。 (3) 各班で身体語彙を一つずつ担当する。班内でも個人に担当させる。	短冊 プリント① プリント② プリント③
第二時	(1) 慣用句が日本の伝統的な表現の仕方であり、身体を語句を含む慣用句が多いことを理解させる。	(1) 前時のプリントを印刷し作った慣用句集を見る。 ①日常生活のなかで良く使われ、その時々的心情や状況を表すのにぴったりあったことば、表現があることを理解する。	慣用句集 掲示資料 プリント (ノートに貼る)
第三時 本時	(1) 個人に慣用句を担当させ、その意味・用法について調べ、それにふさわしい場面の用例を作らせる。	(1) 身体語彙を含む慣用句が書かれたカードを、一人づつ教師からもらい、意味・用法について調べ、慣用句クイズを作る。	掲示資料 とりのこ用紙

6 本時の指導計画

(1) 単元名 日本語の諸相

(2) 本時の指導目標

- ① 慣用句が日常生活の場で良く使われる表現であることを理解させる。
- ② その時々的心情や状況を表すのにぴったりあったことば、表現があることを理解させる。
- ③ 身体語彙を含む慣用句を身につけさせ、実際に使える力を身につけさせる。

(3) 授業仮説

日常生活における慣用句の意味・用例を学び、ことば遊び（ゲーム形式）による授業展開をすることによって、慣用句に興味を持ち、意欲的に慣用句の用例を作っていこうとする姿勢が養われるであろう。

(4) 準備するもの

・小冊子（慣用句集） ・掲示資料 ・国語辞典

(5) 展開

時間	指導内容	学習活動	備考
導入	(1) 前時までの内容を確認させる。 (2) 慣用句について確認する (3) 本時の流れを説明する。	(1) 教師の話聞き、前時の学習を思い出す。 (2) 日常生活の中でよく使われる表現であることを確認する。 (3) 慣用句当てゲームをすることを知らせる。	慣用句集
展開	(1) 慣用句当てゲームの概略を説明する。 ①日常生活の中でどのような場面に使われるかを想定して問題を作ること。 ②一人一問担当することを説明する。 ③次時まで完成させることを伝え、時間を確認する。 (2) 個人に慣用句を担当させその意味・用法について調べそれにふさわしい場面の用例を作らせる。 (3) 発展 ・作り終えた生徒には、担当慣用句を追加問題として与える。あるいは、班の仲間の問題作成を手助けさせる。	(1) 前時に使用した掲示資料を見て概略を知る ①同じ中学生が作った例を見て、やる気を出す ②一人一問担当し、他の人には秘密にすることを確認する。 ③教師に相談できるのは、一度だけであること、自力で作ることを理解する。 (2) 身体語彙を含む慣用句が書かれたカードを一人ずつ教師からもらう。 ①他の人には秘密にする。但し、班の人には相談しても良い。 ②もらうまでの間、慣用句集を見たり、辞典で確認したり、作る練習をしている。 ③もらったらすぐにとりかかる。 ④教師に相談するのは一回に限る。但し教師が必要と認めたらその限りではない。 (3) 出来上がった問題は教師に提出する。 ・次の問題をもらう。 ・班の仲間の手助けをする。	掲示資料 プリント 短冊 ・事前に担当語句と担当者は決めておく。 ・担当した慣用句は秘密にしておく。ゲームが成立しない ・なるべく班内で作り上げられるようにする。
まとめ	(1) 次時の確認をする。 (2) 自己評価をさせる。 ・理解できたこと ・疑問に思うこと・感想	(1) 次時で慣用句当てゲームの問題を完成させることを確認する。 (2) 自己評価をする。	自己評価のプリント

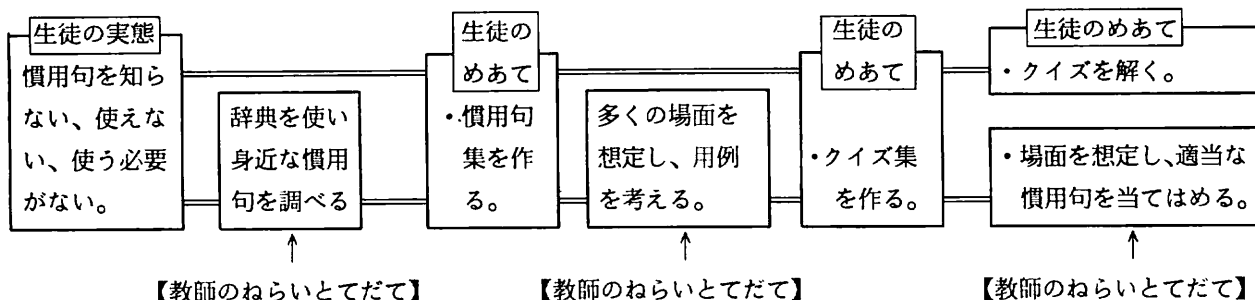
7 評価

- ① 積極的に授業に参加し、慣用句クイズを作ろうとしたか。（関心・意欲・態度）
- ② 似たような慣用句でも、その時々的心情や状況に応じて使い分けられることを理解し、具体的な用例を作ることができたか。（表現）

8 結果の考察

(1) 授業から

子供達が授業に意欲的に取り組むために、以下の流れで、ことば遊びを用い、授業を展開した。



文法や言語事項の授業となると、興味が薄く、逃げ腰になりがちであった。クイズを作るという作業を取り入れることで、生徒は興味を持ち、積極的に授業に参加している。生徒の感想からもわかるように、クイズを作ることは難しいが、できあがったときの満足感が得られている。「もっと作りたい」「友達の問題も解きたい」という感想もあり、解けたときの満足感が得られて、更に他の問題を解いていこうという向上心が生まれた。ことば遊びを用いた授業展開は、子供の興味・意欲・関心を引き出し、真剣にことばに向き合う姿勢を導き出すことができた。

生徒の感想
みんなでクイズを作ったり、解いたりして面白かった。わからないところも何回かあったけれど、慣用句集でいろんな慣用句を探して答を当てたりした。クイズを作るのがちょっと難しかったけどできあがって良かった。楽しい授業だった。
3年2組 運天晶子

(2) 生徒の作品から

クイズが作りやすいように、生徒が作成した慣用句集の中から慣用句を抜き出し、使用頻度や難易度、生徒の経験、実態に合わせて担当語句を決めていった。次にあげる作品も、経験したことを基にクイズを作っている。語彙力に乏しく授業における集中力にも欠けている男子生徒である。経験したことと結びつけられれば、クイズを作りあげられるのではないかと考えた。バスケット部で活発に活動しているので、「歯を食いしばる」という慣用句を与えた。作ろうとするがなかなか場面が思い浮かばないようだったので、教師が場面をイメージできるように、指導した。結果、実際の経験と結びつき、クイズを完成させることができた。語彙力が不足気味の生徒だが、与えられた慣用句が使われる状況をイメージ出来たので、クイズが作りやすかったのであろう。

<歯を食いしばる>

生徒作品

祥二 「俊、お前手をなににしたのか？また、けがしたのか？」
俊 「うん。昨日のバスケットの練習試合で相手とぶつかって、指と指の間を切ったんだ。」
祥二 「それは、痛かっただろうな。」
俊 「うん。痛かったけど て、がんばったぜ。」

(3) 授業後の感想から

慣用句が身近なものであること、日常的に使えるようにするために、いろいろな手だてを用いた。その結果、全員が慣用句集に自分のページがあり、クイズ集にも全員の作品を載せることができた。生徒の感想からも、授業に意欲的・積極的に参加した様子がわかる。

「意味が分からない」「使い方がわ

感想① 面白かったです。本を使わないかわりに辞典を良く使いましたので、今まで知らなかったことばもわかるようになりました。
感想② 私が日常良く使うのが「たなにおく」です。～略～ 知らないうちに使っていたんだあと、思っぴっくりしました。また他にもいろいろな慣用句が日常で使えるようになりたいです。
感想③ 僕は慣用句クイズが作れたのでとても嬉しかったです。こんどまた作りたいです。

からない」「使う必要がない」と言っていた生徒達が、感想に現れているように、「日常生活で使えるようになりたい」とか「もっと作りたい」という感想に変わってきた。慣用句を日常生活の場で適切に表現しようとする姿勢を育てたいというのが指導者の目標であった。授業を通して、生徒達が慣用句を生活の場で使っていきたい、使えるようになりたいという気持ちに変わり、言語生活を豊かにしようとする態度に変わってきた。

感想④ ～略～ 最初は難しいかなあと考えていたけど
慣れたら面白いようにどんどん言葉が出てきた。
これからも日常生活で使っていきたい。

感想⑤ ～略～ 自分が調べたのとか、慣用句集で新しく慣用句を知ることができたときは少し嬉しかった。クイズ集はそれぞれの個性が出ていておもしろかった。授業の後、ちょっとした慣用句ブーム!?でみんな慣れない言葉を精一杯使ったり無理にも慣用句に結びつけていたりして、もうみんな変でおもしろかった。大人になるまでに使えるようになりたいですね。

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) ことばは、日常無意識に使うものであり、個々によっても差がある。今回の授業で生徒に、言語生活を見つめさせ、ことばと向き合う姿勢を作らせることができた。
- (2) 語彙を豊かにするために、慣用句を取り上げ、ことば遊びによる授業展開を行うことによって、生徒が慣用句に興味を持ち、日常会話に意欲的に用いようとした。
- (3) クラスで作った慣用句集は、興味を持って取り組みやすくし、毎時間欠かさず活用していた。
- (4) 慣用句クイズを作らせる場合、作品例に身近な人物を登場させたことと、個々に応じて担当慣用句を与えたことで全員が第3時で慣用句クイズを作ることができた。

2 今後の課題

(1) 教師自身の研修

指導要領には、日常の言語生活に必要な語句・語彙の基本語彙は、はっきり示されていない。したがって、教師は自分なりに取捨選択して、ことばの指導を創っていく必要がある。しかし、それには、教師自身も常日頃からことばに関する識見を高める必要がある。

(2) 個のとらえ方

今回の授業では、日々の学校生活および授業を通して、生徒一人ひとりの様子や学習の状況のある程度把握していたので、生徒に担当させる慣用句も決めやすかった。今後とも、生徒一人ひとりの言語生活を把握する必要がある。

(3) 個に応じた指導、個を生かす指導

生徒の個に応じた問題を与えたが、成績上位者に対する配慮が足りず無駄な時間を過ごさせてしまった。早めに作り上げる生徒がいることを予想して、問題文の中に複数の慣用句を入れさせるなどの課題を提示しておくべきであった。

【主な参考文献】

- | | | | |
|-------------------|--------------------------|-------------|----------|
| 平井昌夫 | 『語い指導』 | 明治図書 | 1961年10月 |
| 文部省 | 『中学校国語指導資料第2集 言語事項の学習指導』 | 東洋館出版社 | 1980年11月 |
| 倉沢栄吉・青年国語研究所 | 『語句・語いの指導過程 言語事項の指導の実践』 | 新光閣書店 | 1982年6月 |
| 広野昭甫 | 『学習意欲を高める ことば遊びの指導』 | 教育出版 | 1982年8月 |
| 田近洵一・ことばと教育の会 | 『しなやかな発想を育てる 教室のことば遊び』 | 教育出版 | 1984年7月 |
| 金田一春彦 | 『日本語 新版(上)』 | 岩波書店 | 1988年1月 |
| 北川茂治 | 『国語科の解説と展開』 | (株) 教育開発研究所 | 1989年8月 |
| 中学校国語科教育実践講座刊行会編集 | 『中学校国語科教育実践講座』第9巻 発声・発音 | | |
| | ・漢字・語句・語彙の学習指導<言語事項1> | (株) ニチブン | 1997年3月 |
| 文部省 | 『中学校学習指導要領』 | 大蔵省印刷局 | 1998年10月 |